

ヒロハアカガシ (大橋広好^a, 大橋一晶^b)

Hiroyoshi OHASHI^a and Kazuaki OHASHI^b: A Form of *Quercus acuta* Thunb. (Fagaceae)

アカガシの変種として *Quercus acuta* Thunb. var. *acutiformis* Nakai が福岡県古処山から記録され (Nakai 1927a), これは後に種として *Cyclobalanopsis acutiformis* (Nakai) Nakai とされた (中井 1939). この植物はヒロハアカガシと呼ばれることが多く, ここでもそのように呼ぶが, 和名については後で述べる. ヒロハアカガシは形態的に母種と連続するとしてアカガシと区別しない見方があるが (福岡県高等学校生物研究部会 1975, 大場 1989), 変種として認められることが多い (大井 1953, 1965a, 1965b, 杉本 1961, 北村・村田 1979, 大井・北川 1992). 中井 (1939) は, この植物は福岡, 熊本, 鹿児島, 各県などに分布するとしたが, 北村・村田 (1979) は古処山のみ, 初島 (2004) は九州各県にあるとした.

ヒロハアカガシは葉身が楕円形, 長さ 7–13 cm, 幅 4–6.5 cm, 質厚く, 表面では脈間が隆起して主脈は凹み, 表裏にしわがより, 中部と上部に鈍鋸歯がある. 葉身の両端は微突形. 側脈は 10–14 対. また, 堅果は稜線が隆起し, 殻斗は厚質で毛が多いとされた (Nakai 1927a, 中井 1939). しかし, タイプは葉が小形で葉先端に少し鈍鋸歯があり, 葉身の基部は鈍形から円形であり, アカガシのように鋭形から鋭尖形とはならない点で異なっている.

このような形態的特徴は個別にはアカガシの変異内に見ることができる. 葉が小形で卵形から楕円形, タイプ標本に似るが基部鋭形のアカガシは九州以外にも本州 (例, 大阪 Murata & Sawada 33117 TUS; 宇都宮 Sekimoto TNS101439; 新潟市 Iwano 1479 TUS; 気仙沼市 Ohashi & al. 69114 TUS) と四国 (例, 小豆島 Ohashi & al. 10 Nov. 1975 TI; 横倉山 Tuyama s. n. TI; Sohma & al. 18 Oct. 1970 TUSG) の各地に散見される. 葉身表面の側脈間が隆起する形 (例, 和歌山県 Okamoto 19460 TI) は各地に多い. また, 堅果の稜線が隆起し, 厚質の殻斗は九州産の標本に多く見られ, 葉の形と関連が見られない.

しかし, ヒロハアカガシは葉によく特徴が現れている. 小形, 厚質, 有鈍鋸歯, 葉身基部鈍形から円形であることの諸特徴を同時に持つ形はアカガシに連続しないと思われる. また, この形は九州に限らず, アカガシの分布域内に散見され, 茨城県筑波山 Sugimoto 6 May 1928 (TNS); 静岡県 Kondo & Fukuji 691 (TNS); 兵庫県淡路島 Fujii & Kobayashi 4334 (TNS); 滋賀県 Murata & Nishimura 24 June 1973 (TNS) などがある. 一形として認めることができると思われるので, アカガシの品種のランクで区別することにしたい.

最近, 初島 (2004) はこの扱いで組みかえを作っているが裸名であり, これを正式に発表し, 併せて *Quercus acuta* var. *acutiformis* Nakai のレクトタイプを指定する. また, 和名についても整理しておきたい.

Quercus acuta Thunb.

f. *acutiformis* (Nakai) Hatus. [Fl. Kyushu: 60 (2004), nom. nud.] ex H. Ohashi, stat. nov.

Quercus acuta Thunb. var. *acutiformis* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 41: 504 (1927), ut *acutaeformis* [Lectotype: Fukuoka Pref. (Chikuzen Prov.), in summo montis Koshozan. Y. Nabeshima, Oct. 1926, TI (designated here), isolectotype TUS; loc. cit. T. Nakai 16 Aug. 1926, TI-syntypes, TUS-syntypes]; Makino & Nemoto, Fl. Jap. ed. 2: 197 (1931); Ohwi, Fl. Jap.: 421 (1953), Fl. Jap. ed. Engl.: 378 (1965), Fl. Jap. ed. rev.: 491 (1965); Kitamura & Murata, Col. Illust. Woody Pl. Jap. 2: 271 (1979); Ohwi & Kitag., New Fl. Jap.: 560 (1992).

Cyclobalanopsis acuta (Thunb.) Oerst. var. *acutaeformis* (Nakai) Kudo & Matsum. in Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa 20: 16 (1930); Nemoto, Fl. Jap. Suppl.: 129 (1936); Sugim., New Keys Jap. Trees: 121 (1962) & New Keys Woody Pl. Jap.: 114 (1972).

Cyclobalanopsis acutaeformis (Nakai) Nakai in J. Jpn. Bot. 15: 197 (1939).

和名: ヒロハアカガシ (大井 1953).

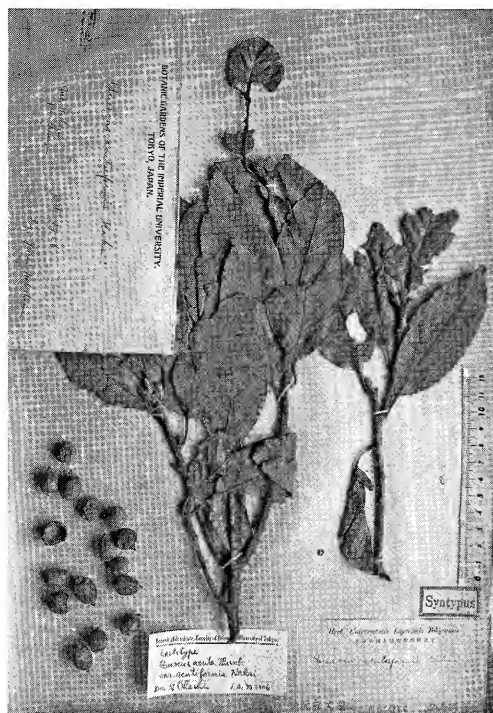


Fig. 1. Lectotype of *Quercus acuta* Thunb. var. *acutiformis* Nakai (TI).

レクトタイプ (Fig. 1): Nakai (1927a) は葉と果実の特徴によって var. *acutiformis* をアカガシから区別した。両器官を備えたシタイプは Nabeshima Oct. 1926 の中に 1 枚だけが TI にある。この標本は 2 本の枝が台紙に貼り付けられており、果実を入れた小石川植物園の袋がつけられている。袋には中井の手で学名、産地、採集日、採集者が書かれている。枝に果実がついていた跡は見られないので、おそらく地面に落ちていた果実を拾い集めて標本としたと思われる。Nakai (1927a) は本樹は 1 本だけと記録していることから、この標本の果実と枝とは同一個体からの標本であると思われる。この標本を var. *acutiformis* Nakai のレクトタイプと指定する。

和名：中井 (1927b) は最初に新変種をヒロハアラカシと名付けた。その解説に「葉は一見アラカシ状にして、葉裏は緑色」とある。葉をアラカシの葉に似ていると見てもこの和

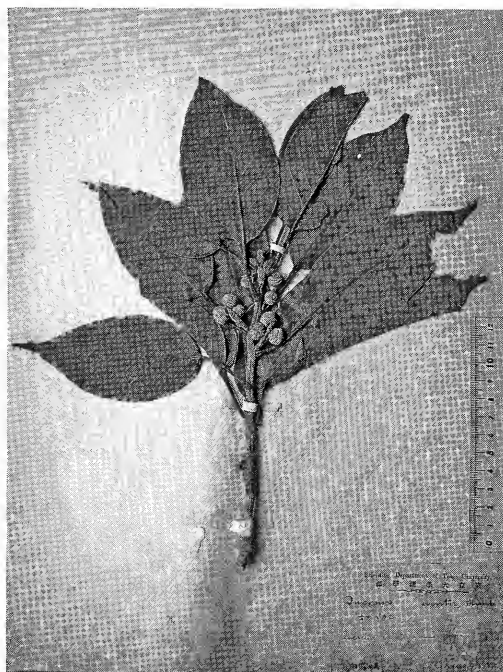


Fig. 2. *Quercus acuta* Thunb. var. *acutiformis* Nakai collected by J. Matsumura in Mt. Kirishima, Miyazaki Prefecture, in 1882, which Matsumura named "Ôba-akagashi" in Japanese.

名はアカガシの変種として紛らわしい。牧野・根本 (1931) はこの和名を引用せずに var. *acutaeformis* Nakai をノコバアカガシと新称した。ノコバ (鋸葉) はこの変種の葉形としていささか大袈裟に過ぎ、またアラカシを連想させると思う。中井 (1939) はこの変種をカシ属の種に変えると共に、既存の和名に言及せずに、アツバアカガシと命名した。さらに大井 (1953) もこれまでの和名にふれず、ヒロハアカガシと 4 度目の新和名をつけた。その後の主な植物誌ではこの和名が受け継がれているが (Ohwi 1965a, 大井 1965b, 北村・村田 1979, 大場 1989, 大井・北川 1992, 初島 2004), アツバアカガシも使われたことがある (杉本 1961, 1972)。ヒロハアカガシの名はオオバガシやオオアカガシのような類似の名がある。松村 (1900) がオオバガシと

ラベル上に明記した標本（日向霧島 4 Aug. 1882 J. Matsumura TI）（Fig. 2）を中井は *acutiformis* と同定している。しかし、以後の混乱を避けるためにヒロハアカガシで統一するのがよいと思われる。

終わりに、所蔵標本を調べさせていただいた東京大学総合研究博物館ハーバリウム (TI) および国立科学博物館ハーバリウム (TNS) にお礼申し上げます。

引用文献

- 福岡県高等学校生物研究部会 1975. 福岡県植物誌. 博洋社, 福岡.
 初島住彦 2004. 九州植物目録. 鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No. 1. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
 北村四郎, 村田 源 1979. 原色日本植物図鑑 木本編 II. 保育社, 大阪.
 牧野富太郎, 根本莞爾. 1931. 訂正増補日本植物総覧. 春陽堂, 東京.
 松村任三 1900. 改正増補植物名彙. 丸善, 東京.
 Nakai T. 1927a. *Notulae ad plantas Japoniae &*

- Koreae*. XXXIV. Bot. Mag. Tokyo 41: 501–522.
 中井猛之進 1927b. 日鮮植物管見第三十四の解. Bot. Mag. Tokyo 41: 528–536.
 — 1939. 日本産ノくりがし属植物並ニ常緑かし類ニ就イテ (其一). 植物研究雑誌 15: 185–204.
 大井次三郎. 1953. 日本植物誌. 至文堂, 東京.
 Ohwi J. 1965a. *Flora of Japan*, English ed. Smithsonian Institution, Washington DC.
 大井次三郎 1965b. 改訂新版日本植物誌顕花篇. 至文堂, 東京.
 — (著)・北川政夫 (改訂) 1992. 新日本植物誌顕花篇. 至文堂, 東京.
 大場秀章 1989. ブナ科. 佐竹義輔, 原寛, 亘理俊次, 富成忠夫 (編), 日本の野生植物. 木本 I. pp. 66–78. 平凡社, 東京.
 大橋広好, 佐々木 豊, 大橋一晶 2006. アカガシの分布. 植物研究雑誌 81: 000–000.
 杉本順一 1961. 日本樹木総検索誌. 六月社, 大阪.
 — 1972. 新日本樹木総検索誌. 井上書店, 東京.

(^a東北大学植物園津田記念館,

^b大阪大学大学院薬学研究科分子生物学分野)

Syo KUROKAWA: Two New Names in *Parmotrema* (Parmeliaceae)

ウメノキゴケ属の2新名 (黒川 道)

Blanco et al. (2005) recently reduced four genera, *Canomaculina*, *Concamerella*, *Parmelaria* and *Rimelia*, to synonyms of *Parmotrema*, based on the results of molecular analyses on parmotrema lichens. As a consequence, they proposed 19 new combinations under *Parmotrema*. Unfortunately, however, two of them are later homonyms under the genus and new names are necessary and proposed below.

***Parmotrema neopustulatum* Kurok., nom. nov.**

Rimelia pustulata Elix & Bawingan in Mycotaxon 81: 252 (2002) – *Parmotrema pustulatum* (Elix & Bawingan) O. Blanco, A. Crespo, Divakar, Elix & Lumbsch in Mycologia 97: 157 (2005), non *Parmotrema*

pustulatum Louwhoff & Elix in Mycotaxon 75: 199 (2000).

***Parmotrema neosticticum* Kurok., nom. nov.**

Rimelia stictica Louwhoff & Elix in Mycotaxon 68: 452 (1998) – *Parmotrema sticticum* (Louwhoff & Elix) O. Blanco, A. Crespo, Divakar, Elix & Lumbsch in Mycologia 97: 158 (2005), non *Parmotrema sticticum* (Duby) M. Choisy in Bull. Mens. Soc. Linn., Lyon 21: 176 (1952), ut *sticticaum*.

Literature cited

- Blanco A., Crespo A., Divakar, P. K. Elix J. A. and Lumbsch H. T. 2005. Molecular phylogeny of parmotrema lichens (Ascomycota, Parmeliaceae). Mycologia 97: 150–159.